

## 書 評

スタンプ著、別枝篤彦・中村和郎訳『生と死の地理学』

古今書院, 1967年, 11+146 pp.

L. Dudley Stamp, *The Geography of Life and Death*, 1964.

1. 本書は世界地理学会の元老であるイギリスのスタンプ教授 (Sir Dudley Stamp, 1898-1966) の最後の著作である。医学地理学 medical Geography とよばれる新しい分野に対する極めて野心的な試みであって、人口学や栄養学の観点からも興味深い。

スタンプ教授の本書に展開された構想の特徴は次の諸点にあると思われる。第1点は、疾病や死因の地域分布を地理学的に表現するという医学地理学の在来の手法を拡大したばかりでなく、医学において等閑視されている人間の健康と生存の問題を導入したことである。本書が Life と Death の地理学とよばれたのもこのような理由によるものである。第2点は、疾病、死亡と重要な関係をもっている栄養問題についても分布論を行なうと共に彼自身の基本的考えかたをあきらかにしたことである。第3は医学地理学の技術論的な側面と共に医学地理学の究局目的が人間の健康、長寿、幸福の達成にあるという積極的側面を強調していることである。要するに、スタンプ教授は人間の不健康、疾病、死亡と広義の環境要因との関係をあきらかにする上において医学地理学が果しうる役割をあきらかにし、それが人類の幸福と能率の増進に貢献することを強調したのである。

2. 本書は次の10章から構成されている。I健康と疾病、IIだれが、何を、どこで—そして、なぜ、IIIコロラの盛衰、IV世界の殺し屋、V熱帯の生活、VIアフリカの支配者達、VII栄養不良、VIII家での死亡、IX健康を求めて、X今後の仕事。

ここでは特にVIIの栄養不良について紹介してみよう。スタンプ教授は1956年の第18回国際地理学会議 (リオ・デジャネイロ) の会長演説の中で、農業生産物の100万カロリーを標準栄養単位 (Standard Nutrition Unit) とする提唱を行なった。この尺度はすべての農産物を共通の単位に換算できるという利点をもっている。さらに料理における食品の廃棄量を10%と推計し、1年間の消費食糧の総熱量を90カロリーと計算し、1日平均2,464カロリーをもって基準目標とし、特に世界における飢餓追放の努力目標としたことは現実的、政策的意義をもっている。また、スタンプ教授は人間の生活、労働に必要な栄養素の詳細な分析を行ったあと、人間をふくめて動物とはある程度まで食物の正しい配合を選択する本能をもっており、したがって変化に富んだ食事をしておればカロリーも必要な蛋白質、ビタミンあるいは微量栄養素もおのずから摂取されるものであることを主張している。そして、医師はただ欠乏症の兆候を注意するだけでよく、しかも欠乏症は、欠乏しているものをほんの少し与えるだけでかんたんに直すことができるかといっていることは、栄養論の真髓であるといってもよい。

また、スタンプ教授は、Jacques M. May 博士の食事と欠乏症の世界地図ならびに東南アジアとアフリカにおける疾病の分布図を紹介しているが、これは、人口研究にとって貴重な情報である。

3. スタンプ博士の研究結果による興味深い点をあげてみると次の如くである。第1は遊牧民族が牧草地を求めて移動するが、このような遊牧はマラリヤを避けることががんらいの動機となっているという指摘である。第2は、移民における死亡率パターンがかなり急速に移住国のパターンに接近し、出身国とは全く異なったものとなるという指摘である。第3は、肺がんの地理的分布を基礎としてこれが都市病であり、喫煙との関係を批判した分析である。また、イギリスの新しい都市はスラムがない代りに自殺や「新都市の憂うつ病」といった精神病の発生を指摘すると共にこれらのことは地理的分布と環境の研究によってその原因が究明されねばならないといっている。スタンプ教授の医学地理学研究は人口学にもいくたの示唆を与えてくれる。特に、人口現象の分布の地図化と環境要因との関係についての分析手法は、人口学においても積極的に導入される必要があると考えられる。

(内野澄子)